二十四歳の憂欝

源氏鶏太

Roman Books

昭和41年2月10日　第1刷発行
昭和47年1月30日　第10刷発行

二十四歳の憂鬱

280円

著者　源氏鶏太
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号　112
電話東京03(945)1111(大代表)
振替東京3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　有限会社中沢製本

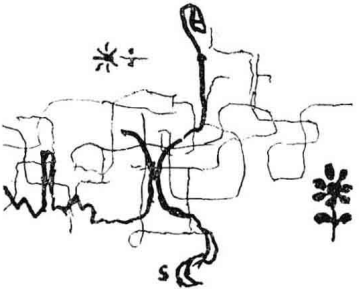
©源氏鶏太　昭和三十八年

(落丁本・乱丁本はお取りかえいたします)　Printed in Japan

0293-112512-2253 (0)　(文2)

二十四歳の憂欝

源　氏　鶏　太



Roman Books

装
幀
鈴
木
義
治

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

目次

東京駅……一三
悪い予感……一八
ホテル……二五
ある家庭の事情……三一
銀座の孤独……三七
テール・ランプ……四三
洋服生地……五〇
分相応……五六
ある忠告……六三
花……六九
俎上の鯉……七五
一つの発見……八一

鏡……八八
別れ話……九四
ある名案……一〇〇
ある善意……一〇七
芝居……一一三
終止符……一一九
大嫌い……一二六
その人あり……一三三
隣室の女……一三八
一心同体……一四四
電話……一五一
問答無用……一五七
邪魔者……一六三
乗りかかった船……一七〇

心の中の悪魔……一七六
バカな女……一八二
宿命……一八九
悪女……一九五
完全な失恋……二〇一
悪は急げ……二〇七
卑怯な男……二一四
大阪へ……二二〇
感じの悪い女……二二六
女の喧嘩……二二三
別れの酒……二三九
妊娠……二四五
貞女のように……二五一
狭い世間……二五八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

迷惑千万……二六四
大切な人……二七〇
幸せな家族……二七七
平行線……二八三
女の十字架……二八九

二十四歳の憂鬱

東京駅

1

大阪発の特別急行列車「はと」が東京駅へ着くのは、午後七時半の予定である。

滝沢みき子は、十番ホームへの階段を上っていきながら腕時計を見て、

「あと、三十分あるわ。」

と、つぶやくようにいった。

恐らく列車は、まだ横浜駅を通り過ぎていないだろう。したがって、プラット・ホームはガランとしていて、出迎人らしい人影が、ちらほらと見えている程度であった。そのガランとしたホームを、初夏の爽やかな風が吹き抜けていた。

滝沢みき子は、早く来過ぎてしまったのだ。しかし、そのことをすこしも後悔していなかった。しんじつ、その表情は、幸せそうであった。今夜、これからへの期待に、その目は、いきいきとかがやいているようだ。ただし、もししさいに眺めたなら、そのいきいきとした目のどこかに、人目を恐れるような気配があったかも……。

勿論、滝沢みき子は、自分で、そのことに気がついていた。そして、そういう自分の弱気に、腹を立てて、

（あたしは、何んにも悪いことをしているんではないわ）

と、主張したいのだった。

いつだって、二十四歳の娘らしく、胸を張っていたいのだった。

しかし、それはあくまで、滝沢みき子だけの理屈であって、果して、世間のいわゆる常識が、そういうことを許すか、どうか。いや、許す筈がないのである。

とにかく、青地東介には、妻子があるのだ。いかなる理由があるにしろ、妻子のある男と通じることは、批難の対象になるのである。悪いことをしていることになるのだ。

（あたしは、そういう世間の常識なんか相手にしないわ）

しかし、結局は、深くうなだれて、

（悲しいわ）
と、目尻をうっすらと濡らすのだった。
世間の常識よりも、自分の心の奥からの声が、滝沢みき子をそうさせるのであったろうか。しかし、青地とのことは、どうにもしかたがなかったのだ。
「あと、二十分だわ。」
滝沢みき子の周囲にも、ぽつぽつ人影がふえて来ていた。
ふつうの旅客だったら、そろそろ下車の用意にかかるところだろう。が、青地東介には、そういうことは考えられなかった。ぎりぎりまで眠っているか、仕事のことを考えているか、であろう。尤も、青地東介の場合、いつだって、荷物といえば、ボストン・バッグ一個だけなのだから、あわてる必要はないわけだった。そして、滝沢みき子は、青地東介の、そういう悠揚としていて、その癖、妙に人間的に迫力のあるところが好きなのだった。体軀は、堂堂としていて、偉丈夫を感じさせる。眉毛が濃く、唇許が引きしまっている。四十二歳の男盛りなのだ。K商事株式会社の大阪支店長をしていた。将来は、重役になり、社長になるだろうと噂をされている人物だった。
滝沢みき子は、周囲に自分の知った顔のないのをたしかめてから、そこらをゆっくりと歩きはじめた。中肉で、やや背は高い方だ。目立つほどの美貌ではなかったが、しかし、色が白く、肌が綺麗で、決して二流品ではない。女としても、すっかり成熟しているようだ。この一年間の滝沢みき子の女としての成熟振りには、驚嘆すべきものがあったといっていい。いい換えれば、その原因は、青地東介にあったのだ。
しかし、そのことを知っている者は、滝沢みき子の勤めている丸ノ内のA商事株式会社の中には、一人もいない筈だった。勿論、みき子は、あくまで内緒にしていて、自分にそういう秘密のあることなんか、おくびにも出さない。いい換えれば、猫をかむって、勤めているのである。
「近頃、滝沢さんは、まるで花が咲いたように綺麗になったな。」
一ヵ月程前、課長がいった。
「だって、課長さん。これでも、お年頃なんですもの。」
みき子は、頬をあかくして答えた。答えながら、青地東介のことを思い出して、胸の底を熱くしていた。
「お年頃って、いくつ？」
「二十四歳です。」
「二十四歳なら……」

「何んですの？」
「そろそろ、お嫁に行った方がいいな。」
「二十五歳になってからでもかまわないでしょう？」
「そりゃアもちろんだが、しかし、娘の二十四歳と二十五歳では、受ける感じが随分と違うんだよ。」
「わかりませんわ。」
「君だって、二十五歳になってみれば、思い当るだろう。」
「では、あたし、二十五歳になるまで、待ってみます。」
「そんなことをいっていて、君には好きな男がないのか。」
「ありません。」
　また、青地東介の顔が、頭の中に閃めいた。
「では、君を好きだ、という男は？」
「それも、ございません。」
「信じられんことだが。」
「どうか、信じて下さい。」
「しかし、君は、そんなふうにいいながら、ちっともめそめそしていないな。」
「きっと、どこかに足りないところがあるんでしょう。」
「しかし、そのうちに、いろいろと悩んだり、考えたりするに違いない。」
「……」
「僕の長年の経験で、女の二十四歳を、そういう意味で、危険な年齢だと思っている。」
「危険な年齢？」
「そう。だから、自重することだ。困った問題が起ったとき、僕でよかったら、いつだって相談に乗って上げる。」
「お願いします。」
　滝沢みき子は、神妙に頭を下げて引き下って来たのだが、
（もし、あたしが青地さんとあんなことをしているとわかったら、あの課長さん、何んとおっしゃるだろうか）
　と、思っていた。
　何故なら、課長の宮下康久と、青地東介とは、クラス・メートなのだ。
　しかし、その後、みき子は、宮下課長のいった、
（危険な年齢……）
　という言葉について、いろいろと考えさせられていた。
（危険な年齢だから、青地さんと、ああいうことになったのかも……）
　たしかに、そういうことがいえそうだ。
「あと、十分だわ。」

そのとき、みき子は肩をうしろからぽんと叩かれた。みき子は、胸をどきんとさせ、顔色を青くして振り向いた。
「まア。」
そこに、同じ会社の三森三男の若若しい笑顔を見た。

2

「やア。」
三森三男は、あくまで明るくいっておいて、
「どなたか、お迎え？」
「ええ。」
「僕は、母親なんだ。」
「そう。」
「久し振りで、田舎からやってくるんで、親孝行をしておこうと思ってね。」
「いいことだわ。」
「と、思ってくれる？」
「だって、親孝行について、悪くいう人なんか、いないでしょう。」
「そこで一つ、頼みがあるんだよ。」
「何んのこと？」
「ちょっとでいいから、僕の母親に会ってくれないか。」
「あたしが？」
「そうだ。」
「いったい、何んの必要があって、ですの？」
「憤らないで貰いたいのだ。」
「あたし、理由によっては、憤りましてよ。」
「が、そこを我慢して。」
「早く、おっしゃってよ。」
みき子は、すこしいらいらするようにいって、ホームの時計を見た。三森三男も、同じく見て、
「大丈夫。まだ、七分ある。」
と、落ちつき払っていってから、
「恐らく、君は、びっくりするだろうな。」
「あたしには、何んのことかわかりません。」
「当然のことだ。僕自身、たった今、大決心したばかりなんだから。」
「大決心？」
「さっきから、君の何んとなく物思いに耽っている姿を見ていて。」
「まア、嫌だ。」
みき子は、眉を寄せた。
「適当に憂いがきいていて、なかなかよかった。素敵だ、と思った。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb